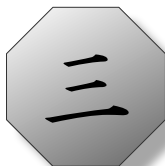


黄金の船、 たどり着きたる先



麦（穀物 P）

目次

登場人物	・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第七章	レース観戦は力なり	8
第八章	新潟千直、見えた力の片鱗	42
間章	チーム名紛争、一旦終結	94

登場人物

※学年設定は当世界（当時空・当ループ）におけるものです。

主人公（トレーナー） 白江亮（しろえりょう）

ゴールドシップとゆかいな仲間たちのチーム『アクアマリン』のトレーナー（三十代ヒト男性）。偶然出会ったゴールドシップに一目惚れして拾った。チーム会議の流れで奇妙なチーム名がついてしまったが、たづなさんに昔のチーム名を書いた書類を提出したので、正式なチーム名は元通りまともなものになった。

時の旅人 ゴールドシップ

自称七百歳。対外的には十七歳の高等部二年生。同じ時期をひたすらループする事象に囚われてしまい、今回が248回目。表でははっちゃけているが、白江トレーナーだけしかない時はもっぱら物静かで綺麗なお姉さんでいることが多い。

チームメンバー メジロマックイーン

スイーツ大好きお茶の間監督な中等部三年生。ゴールドシップのお爺さんの立場だという不思議な世界の存在を聞いてから、年上のゴールドシップのことが本当に孫っぽく見える時が出てきて困っている。

チームメンバー ナイスネイチャ

学園近くの商店街の名誉会長になってしまった中等部三年生。固辞したが祀り上げられた。ヘンな生徒達に取り囲まれたりして結構忙しそうなおトレーナーの手伝いをぼちぼちしているが、トレーナーが一番ヘンなんじゃないかと思ひ始めた。

チームメンバー メジロドール

研修コース・トレーナー課程所属の中等部二年生。漫画を少し描く。自分には走る才能は無いと思っているものの、レースを観て選手の動きを分析するのは好きなので、トレーナーを志望した。絵については観察眼の高さから来る的確な描写に惚れ込んだとアグネスデジタルが掛け値なしに絶賛しているが、大げさだと思っている。

とまこまい観光大使（ゲスト所属） ホッコータルマエ

中等部一年生。まだチームに所属する段階ではないけれども、トレーナーとゴールドシップの勧誘を受け、観光大使の仕事のマネージメント業務を引き受けてくれると聞いて、正式なメンバーになる前からサポートを受けることにした。チームメンバーをプロのとまこまいストにしたいと考えている。

同人作家？（仮所属） アグネスデジタル

中等部二年生。同志トレーナーが家の事情で長期休業することになったため、同志の勧めに従い『仮所属』の名目で移籍。チームトレーナー室になぜか用意されている漫

画・イラスト向けスタジオ設備に興奮して昇天しかけた。ドーベルを本格的に『こちら』に引き込んで、一流の同人作家にしようと企^{たく}んでいる。

自称・ゴールドシップの弟子1 ユーバーレーベン

中等部一年生。ゴールドシップの姿を見た瞬間電撃が走り、同じように立ち尽くしていたウインキートスともども『ゴールドシップ・クルー・クラブ』なるファン組織を作り上げた（後にゴールドシップ公認）。チームメンバーではないが勝手にチームトレーナー室に居着いている。マイペースの具現。

自称・ゴールドシップの弟子2 ウインキートス

中等部一年生。ゴールドシップの姿を見た瞬間電撃が走り、同じように立ち尽くしていたユーザーレーベンともども『ゴールドシップ・クルー・クラブ』なるファン組織を作り上げた。普段はしつかり者でブレイキ役だが、ゴールドシップ絡みのことになると時々暴走する。

第七章 レース観戦は力なり

1 皐月賞

「野郎ども！ 皐月賞さつきを観に行くぞ!!」

「野郎は俺だけしかないぞ」

グラウンドを使った一通りの基礎トレーニングを終えた後のミーティングで、突然ゴールドシップが吼ほえた。この場にはチームメンバーとゲストの総勢八名が勢揃いしていて、

全員が呆気^{あつけ}に取られていた。

しばらくの静寂^{せいじやく}の後、メジロマックイーンが咳払いして話の口火を切った。

「確か明後日ですわね。観戦によつて得られることは大変多いかと。私は観に参りたいと思います」

「そだねー、アタシにとつては遠い存在だけど、やつぱり超一流の世界は眺めてみたいよねえ」

「アタシも。トレーナーになるためにいっぱい学びたいから……」

「よしこれで正規メンバーは全員決まりだな！」

「お静かに！」

ナイスネイチャとメジロドーベルからも前向きな回答が聞こえてきたところで、ゴールドシップがまた嬉しそうに叫び、今度はマックイーンにはたかれていた。

「イテテテテ、ちよつとは加減してくれよなー。ところでタルタルデジたんユーぽんキートスはどうする？」

正式所属できる時期ではないもののゴールドシップが捕まえてきたり、知人のトレーナーの長期休業にあたって仮所属の形で引き受けたり、ゴールドシップの弟子を自称して

入り浸っていたりする子達を呼ぶと、そちらからも前向きな返事があった。

「行きます！ あと、タルタルではなくホッコータルマエでお願いします！」

「このデジタル、ウマ娘ちゃん達の最前線を拝みたいです！ もし天に召されたら骨は拾ってください……」

「わたしも……。あと、ゴールドシップさんから賜^{たまわ}りし愛称・ユーぽんを……今後名乗りたいと思います……」

「ユーちゃんのニックネームいいなー。あ、私もぜひとも参加したいです！」

「よし全員揃ったな！ おっちゃん席確保よろしく！」

「もう満席だ」

「オグフオア！」

勢いよくこちらを振り向いたゴールドシップがその勢いのままスピンして、謎の叫び声を上げて倒れ伏した。

ゴールドシップのことはひとまず横に置いて、他のメンバーにタブレット端末を向け、レース場指定席予約画面を見せた。見事に『満席』の文字が並んでいた。学園関係者向けの指定席はもちろんのこと、一般向けの指定席も同様だった。

「やっぱり二日前じゃ無理だよー」

「やはりいつもの中山ではなくて、東京での開催になっているからでしょうか。学園の目と鼻の先ですし」

ネイチャとマックイーンが残念がっていると、復活したゴールドシップが瞬間移動で俺の横にワープしてきた。

「諦めたらそこで試合終了だぞネイチャとマックイーン！ おっちゃん、裏メニューで最前列を押さえてくれ」

「そんなものはない」

指定席の裏メニューはそもそも無いけれども、関係者向けの入場枠はまだ空きがあったので人数分確保した。どのような作戦で行動するか話し合った結果、東京レース場に乗り込み次第スペースを確保し、第一レースから観戦する方向で決まった。もし寝坊したら皐月賞までには来るよう伝えた。

解散した後、トレーナー室に戻る俺のもとに寄ってきたゴールドシップがツツコミを入れた。

「なあおっちゃん、さっきのアレって作戦っていうほどでもなくね？」

「確かにそうだな」

とはいえ、レース場で他に取れそうな作戦も特にない。ダービーより多少は競争率が低いはずなので何とかなると信じたい。

日曜朝、学園の門の前に全員時間通りに集合できたので、揃って東京レース場に向かった。やはり学園すぐ近くであるせいか、朝から移動する生徒がかなり多い。

「いやー皆さん朝早くから精が出ますねえ」

「私達もその一員ではありますが」

同じ道に行く他の生徒達と我がチームのメンバーを見比べて、ふとあることに気付いた。

「そう言えばうちの面々、全員私服だな」

まわりを歩いているレース場に行きそうな生徒達はみな制服を着ていた。確かに制服姿なら入場口で学生証やら何やらを見せずともフリーパスで通れるし、関係者席へ行くことも容易だった。

「確かに……アタシ達ちよつと浮いてる？」

「一回戻って着替えてきた方がいいでしょうか？」

少し不安そうな表情を見せていたドーベルやタルマエさんの前で軽く手を振って止めた。

「別に制服で来いとは書かれてないから大丈夫だぞ。必要があればトレーナーバッジと職員証を見せて通ればいいし」

「そうだな。いざとなつたらおっちゃんが『どんなことでもトレーニングに結びつける』例のヤバ芸をやればいい」

「さすがにいらん」

俺とゴールドシップのやり取りを聞いて、二人は少し安心したようだった。ちなみに、さらに落ち着き払った超大物ウマ娘・U氏からのコメントは、

「何か指摘が入ったら……近所の……お笑い芸人ウマ娘に……なれば……いいんです……」

「ええ……？」

なぜお笑い芸人になる提案なのかはよく分からなかった。若干浮いた一団になっていたのはせいぜい学園から数百メートルほどのことで、そこから先はいろいろな格好の人が合

流してレース場への流れが出来上がってきた。

それからほどなくして東京レース場に着いた。正門は先ほど開いたばかりのようで、最も早い時間の入場券を持っている観客達がスマートフォンを見せつつ通って行く。学園の生徒達やトレーナーはその横の専用レーンを通ることになる。我々一行は一旦止められたものの、予約時の案内と俺の職員証を見せたら無事通れた。

「さて、この中でレースを現地観戦したことがある人」

質問に対して手を挙げたのはマックイーン、ドーベル、ゴールドシップの三名。想定通りの面々だった。とはいえ、メジロの両名はコースに近いエリアで観たことはまだ無いとのことだった。

「観戦したのは幼い頃でした。安全のためにとのことで、スタンド内の指定席から観たのを覚えております」

「ラモーンさんのエリザベス女王杯を観た時の感動、情熱、あと、少しの怖さを今でも覚えています」

「アタシはいろんなヤツらの走りを一杯見てきたな。ああ、このレース場にいる全員の

をな！」

まっとうなマックイーンとドーベルに対し、何も知らない人が聞いたら何を言っているのか全く分からないコメントをゴールドシップが述べた。今ここにいるメンバーでも、正規メンバーはゴールドシップの言葉の意味するところを理解しているが、他の子達は当然知る由もない。デジタルの顔には『なんだかよくわかりませんけどなんだかすごそう……！』と書いてあったし、ゴールドシップの弟子達は全く理解してはいないものの、二人揃って『なんかカッコイイこと言ってる……』といった感じの恍惚こうこつとした面持ちになっていた。

今日は新潟、東京、京都の三つのレース場で合計三十六レースが開かれる。ここ東京レース場ではクラシック級未勝利戦が四レース、クラシック級一勝クラスが二レース、シニア級については一勝クラスが一レース、二勝クラスが二レース、三勝クラスが一レース、オープンが一レース開かれる。そしてクラシック級GI・皐月賞が第十一レースに組まれていた。

第一レース開始前時点のバ場状態は、芝コースが重、ダートコースが不良と発表されて

いた。幸い天気は良好なので、皐月賞までには芝コースは良バ場になることが期待できる。ダートコースも十二レース頃には重バ場くらいにはなるかもしれない。

第一レースは十時五分発走、ダート一六〇〇に十四名の選手が挑む。ターフビジョンにはダート一六〇〇メートルコースの起点でストレッチをする選手達の姿が映し出されていた。

「なんだか……みんなギラギラしてるつて言うか、なんかもう後がないという雰囲気画面越しにも感じるというか……」

タルマエさんがだいぶ言いにくそうな感じで見たままの感想を述べていた。全員がデビュー前の我がチームで、いきなりレースの世界の厳しさ、あるいは世知辛さを見せるのも、前向きな気持ちを弱めてしまわないか若干不安な面はあった。座学の講義の中には、トレセン学園に來たウマ娘達へのキャリア教育もあって、その中ではレースに挑んだウマ娘の大部分が勝利を得られずに引退することにも触れられているはずだが、実際にそれを目の当たりにするとまた違う思いを抱くことになるう。

「そうだな。この時期のクラシック級未勝利戦は、すでに何戦も走っている選手と、諸々の事情でメイクデビューレースの時期にデビューできずに今が初出走になった子が交じ

る。どちらも言わば『後がない』状態なのは確かだ」

「そうなんですね……」

スタート地点に発走役が姿を見せ、台に上がって赤旗を掲げ、振った。本日最初のファ
ンファーレが演奏され、選手達がスターティングゲートに収まって行く。全員がゲート入
りして、そこから一拍置いてゲートが開き、全員が一斉に飛び出した。

『スタート！ おっと数名ほど出遅れが発生したようです。好スタートを切った四番人
気の三番がハナを切って進みます。その後ろ、十三番も好位置につけてじわりじわりと進出
しています。一番人気の十一番は四番手』

東京のダート一六〇〇のコースは、スタート地点から少し芝の上を走ることになる。わ
ずかな距離とはいえ、高速走行するウマ娘にとっては、コースの材質の差によるわずかな
遅延が勝敗を決することも多い。

マイル戦なので勝負は一分三十秒台で決着する。果たして、初手でスムーズに位置を
取って進んだ十一番の紅白メンコの子が圧倒的な支持での一番人気に応えて快勝した。そ
の一方で、最後方の四名は大きく離されてしまっていて、十着と十一着の間は六バ身、そ
こからクビ差、大差、三バ身差となっていて、トップとシンガリのタイム差は五秒三もつ

いていた。

「こんなに差がついちやうんだ……」

ネイチヤが若干の哀しさを漂わせた声で呟いた。つぶや

「シンガリの子はタイムオーバーになった。URAの規定では最低一か月はレースに出られない。健康観察の上で再度トレーニングを通じてレースの能力を見極めることになる」

「大差で負けるのは、やはり力不足だからなのでしょうか」

マックイーンの問いにはわずかに首を振って答えた。

「その要素が大きい点は否めないが、中には極端なコンディションのバ場のせいで足を傷めて大差負けになる子もいたりする。今回はどちらなのかは分からないけれども」

今回のレースは前が極端に速いわけではなかった。それでもなおタイムオーバーになったとしたら、それが能力不足にせよ、故障などの問題にせよ、別の進路を検討する必要があるとくる。

レースを終えた選手達の様子は様々だった。一着の子はウイナーズサークルで嬉しそうにインタビューに答えていて、上位の子もそれぞれ観客席に向けて御辞儀をしたり、応援に来てくれている人達に手を振っていた。後ろの方の順位になった子は闘志を燃やした

り、泣いていた、中には疲れきってしまって、今にも倒れそうな足取りで地下バ道へ向かう子もいた。

第一レースが終わり、次の第二レースもダート戦なのでコース整備が始まった。そこでふと気付いた。いつもはいろいろ喋りそうなゴールドシップが、一言も発さずに静かにレースを見守っていたことに。

「ゴールドシップ？」

「ん？ ああ、ちよつと昔のこと思い出してたわ」

「そうか」

いつも通りの雰囲気を取り戻したところに、わざわざ尋ね直すこともあるまい。そう思って流し、次のレースに備えて全員分の飲み物を調達しに行った。……無料サービスのお茶なのは勘弁してほしい。給料日直後なのになぜかお金が無いので。

第二レース以降の時間はレースを観たり、レース場に併設されているミュージアムを見学したり、レースの安全を願って建立された、ウマ娘の姿をした観音像にお参りをしたりして過ごし、いよいよ本日のメインレース、第十一レースの皐月賞を迎えた。

☆ ☆ ☆

今回の皐月賞に出走する各選手の人気はかなりばらけていた。実力伯仲はくちゆうという評価だけでなく、コースの得意・不得意要素、例年と異なる東京開催であることも影響している。勝者予想を外したところで大半の人には影響はないが、ウイニングライブで好条件の席を取りたい人にとっては勝ち負けの予想が重要だった。

選手達の中でひととき異彩を放っていたのが六枰十二番、四番人気のオルフェーヴルだった。先月のメデイアインタビューに対して王であることを宣言し、クラシック三冠も既定事項、疑う者に猛省もうせいを要求する傲岸不遜ごうがんふそんな振る舞いは、王は王でも『暴君』と呼ぶにふさわしかった。トレーニングや過去のレースでのインタビュー時のその振る舞いゆえに不安定——『気性難』きせいのなんとの低評価を耳にすることもあった。

しかし、今日の前にいる王は、ただ神々こうこうしかった。

宣言の通り、ただ、勝つ。その姿が脳裏にありありと浮かんた。

「あいつ……やべえな」

「どうした急に」

ゴールドシップの突然の言葉に突っ込みを入れると、彼女はかぶりを振った。

「ああ、いや、オルフェの奴、いつでもどこでも金ピカに輝いてやがんな、つてさ」

「確かに」

「ゴルシちゃんの目が潰れちまうぜ……眩^{まぶ}しすぎてさ」

G Iファンファーレが高らかに鳴り響き、それに合わせての手拍子、そして拍手が沸き起こった。全員がゲートインし、そしてゲートが開かれて、全員が一斉に飛び出した。

『スタートしました。一番と十番が好スタートを切って前へ、十番が先頭になりました』
十番の子がひたすら先頭で飛ばし続け、集団をどんどん置いて行く。千メートル通過時点で五バ身リード、通過タイムは六十秒ぴつたり。そこからさらに開いてリードは七バ身になった。

「先頭の子……あのまま……勝っちゃったり……します……？」

「……彼女は前走のニュージラントトロフィーで勝った。皐月賞に出られる力は持っているし、勝負は時の運。勝つ可能性はある」

ユーバーレーベンさんの問いに、まずは十番の子本人に対する評価を伝えた。そして、

続けた。

「——ただ、さらにその前のスプリングステークスで彼女に勝利した子が、あそこにいる」

後方に控え、コース内側を進むオルフェーヴルを指差した。

そして最終直線。坂を上り切った所から、集団を割って、光が現れた。

「すごい末脚^{すえあし}、ですわね……」

マックイーンを始め、チームの面々が呆然^{ぼうぜん}とする中、最終直線で後ろとの間隔をどんどん開いていったオルフェーヴルが、先頭でゴール板を駆け抜けた。

『——圧勝！ オルフェーヴル、ゴールイン!!』

王が宣言通り、一つ目の冠^{かんむり}を手にした。

「あいつ……やっぱやべえな」

「ああ……」

他の世界では『一族』と称されるほどの交友、ゴールドシップが見たという四本脚のウマの世界では父方共通（これは珍しくないらしい）でゴールドシップとまた異なる強さを見せていたという存在・オルフェーヴルをこの目で見て、俺もゴールドシップも言葉を失った。他のメンバーも同様だった。

「もし私の願い通り、天皇賞への出走がかなうほどの力が身についたら、あの方といつかお手合わせ願うこともあるのでしょうか……」

「いやー、あの強さ、アタシなんかじゃ全然かなわないっしょ……」

「オルフェーヴルさんのあのパワフルさなら、ダートでも勝てちゃうんじゃないでしょうか」

「トレーニングの様子とか、トレーナーさんの仕事の様子とか、見て学んでみたい気がする」

アスリートとしての感想をもらすマックイーン、ネイチャ、そしてホッコータルマエさん、そしてトレーナーの卵らしい所感を述べるドーベル。

さて残る二名、ゴールドシップの弟子を自称する中等部一年生達。

「ここの……餅は……最強ですね……。あんこも……。からみも……。磯辺巻も……」

いそべまき

「ユーちゃん、おろしが口についてる」

「ふむぐつ……ありがとうございます。ひとまず……シエフを呼んで……感謝を伝えなければ……」

「シエフじゃないと思うけど、美味しいって感想伝えたいよね」

超大物過ぎる子と、そのお世話をする子がマイペースを貫いて、東京レース場グルメに舌鼓したつづみを打っていた。彼女達と目が合ったので一応訊きいてみた。

「さっきのレース、どうだった？」

「ああ……圧勝でしたね……まさに……ターフに君臨する王……」

「オルフェーヴルさんならインタビューの通りクラシック三冠だつて夢じゃないと思えました！」

観ていたにはあまりにもあつさりとしたコメントというか、レースではなく着順掲示板だけを見てコメントしたのではないかとも思えてしまうくらいに落ちて着いていた。でも、ゴールドシップは両名を高く評価した。

「ちゃんと見てたんだな弟子諸君。おめーらは超大物になるわ、アタシが保証する」

「ゴールドシップさんから……過分なお褒めほのお言葉……身に余る光栄……」

「がんばります！」

皐月賞の後、ウイナーズサークルで勝者・オルフェーヴルとそのトレーナーに対するインタビューが開かれた。熱狂するファン達に応えるように口を開いたオルフェーヴルは、尊大ささえ感じる堂々とした振る舞いで、ダービーの勝利をも宣言した。

『貴様らは幸運である。三冠の一步目を目の当たりにすることができたのだから』

『一か月の後、余の姿はまたここに在る』

周囲の観客からは、彼女が本当にダービーウマ娘、そして三冠ウマ娘になれるのではと期待する声が聞こえてきた。一部は期待を通り越して確定とまで感じた観客もいたかもしれない。それほど力、そして神々しさを感ぜさせるものだった。我がチームのメンバーも二名を除いてみなオルフェーヴルから目を離せなくなっているようだった。残る二名のうち一名は何かを真剣に考えている風のゴールドシップ、あと一名は灰になつてそのまま風とともに散ろうとしているアグネスデジタルだった。

「このデジタルの人生に一片の悔いなし……」

「いやちよつと待ってデジたん、消えちゃったらちよつと困るんですけど!」

ネイチャがデジタルを揺さぶってなんとか意識を回復させたところで、本日の最終・第十二レースの時間となったため、混雑回避も兼ねてそちらも観てから学園に帰投した。

2 日本ダービー

皐月賞からダービーまでは一か月ほど、引き続きチーム全体で基礎トレーニングをしていたらあつと言う間だった。

「ダービーを現地観戦する人」

聞くまでもないことをチームミーティングで尋ね、案の定その場にいる全員の手が^あ拳^あがった。ゴールドシップ、マツクイーン、ネイチャ、ドーベル、デジタル、そしてすっかり居着いてしまい、最近は自主トレと称してチームの基礎トレーニングにも加わるように

なっていたユーバーレーベンさんとウインキートスさんの七名の参加が決定した。ちなみにこの場にはいないホッコータルマエさんはとまこまい観光大使の仕事が重なっているの
で、後でレース映像を観るとのことだった。

「今回も学園関係者向けの指定席枠は激戦だから、全員分取れることを祈らないとな」

抽選申込フォームに俺の名前とチーム名、メンバー全員分の名前を入力して送信し、画面の前で手を合わせた。それを真似するようにゴールドシップが手を合わせ、他のメンバーもそれに続いた。

「神様仏様仲良くしてる神主さんかんぬし巫女さんみこお坊さん、なにとぞ我々にダービーの指定席を授けてくれたまえ……」

「ネイチヤさんの願掛け、とても効き目がありそうですわね」

「いやー、普段ちよいちよいやつてることが徳として積まれてたらいいなっていう、現金な考えなんですけどね」

みんな（特にネイチヤ）の願掛けの効果があつたのか、全員分の指定席が当選したとのメールが無事届いた。皐月賞の時みたいに『第〇ゼロレース』を繰り広げる真似をしなくても

よくなったけれども、ダービー以外のレースからも得られるものは大きいので、他のレースも観戦する方針で決まった。今回は現地の指定席のところに集合するようにした。

☆ ☆ ☆

東京レース場、第〇^{ゼロ}レース。

開門と同時に第一陣の予約入場枠の観客が早足で門をくぐって観覧スペース確保に向かい始めた。その中には当然ダッシュしようとする客もいるわけで。

「走らないでください！」

G Iレースの時に門付近の場内整理に優先動員されるウマ娘の警備スタッフが声を掛け、なおも走る客がいたらその進路を妨げるように展開する光景が目の前で繰り広げられている。

「すごっ！ こんななってんだ……予約だからもうちょいゆつくりしてるもんだとばかり」

「さすが……ダービー……」

それを横で観察しているのが我がチームのメンバー＆ゲスト達だった。全員朝が早い。ちなみに今回も全員私服だった。

「今年も開門を見届けようと思つたら、同じタイミングで全員勢揃いしたから驚いたぞ」俺の感想に対する答えは、全員揃った大あくびだった。

「……その、昨日は興奮するあまり眠れなくてですね！ 原稿締切前に使うロイヤルビタージュースパワーで一旦は乗り切ったんですが……ふわぁ〜」

アグネスデジタルが目を半分閉じつつ語ると、ユーバーレーベンさんが両手をゆつくりと合わせた。

「なるほど……ロイヤルビタージュース……その手が……ありましたね……ふみゅ」

「ユーちゃん、ロイヤルビタージュースってこの前知らずに一口飲んだアレだよ？ 飲んだ瞬間にトイレに直行してたよね？」

「げっ……やはり……コーヒーに……」

彼女の身に何があつたのかは分からないが、アレを不意打ちで体験してしまつたらしい。一時期学園中でロイヤルビタージュースとカップケーキの組み合わせが疲労回復栄養ドリンクばりに流行ったことがあつたが、カップケーキを食べる前にロイヤルビター

ジュースにやられてしまった生徒やトレーナーが続出したのを覚えている。かく言う俺も今年の春に始末書を書かされた時、同じく反省文を書く羽目になったゴールドシップともどもロイヤルビタージュースに手を出し、うっかり諸行無常を感じて出家しかけた。

それはさておき、この観客席近くにはロイヤルビタージュースは無いし、ましてや観戦客だらけの場で昼寝をさせるわけにはいかない。

「眠かったらどこかで寝てきてまた戻ってきてもいいぞ？ 入場する前に迎えに行くから知らせてくれ」

俺が提案したところ、一人を除いて全員がゴールドシップの先導でどこかに行ってしまった。

「みんな……行っちゃいましたね」

唯一残ったメンバー、ドーベルはいつもと変わらない佇まいだった。

「ドーベルは眠くないか？」

「よく寝たので大丈夫です。せつかくの機会ですし、ダービー以外のレースもよく観て学ばたいです」

「分かった」

いつも通り控えめながらも、少し張り切っている様子が窺^{うかが}えるドーベルに、思わず顔が綻^{ほころ}んだ。

ゴールドシップいわく、別の世界ではGIレースを五勝したというメジロドーベル。この彼女はトレーナー志望で、中等部二年生ながらレースや選手の分析能力はすでに光るものがある。彼女なら特に多くのものをレース観戦から得られるに違いない。

人の波が一旦落ち着いたあたりで二人で関係者用ゲートを通り、指定席に向かった。

第一レースからドーベルと一緒にレースを観戦し、レース展開や各選手の動きをリアルタイムで見ながら評価し、走り方に隠れた作戦を推測していく、ある種の推理ゲームをした。彼女の着目点と展開予想、さらに的中率は中堅トレーナーの自分でも舌を巻くものがあつた。

「さすがだ。勝利インタビューで語られた作戦ドンピシャが三回目、お世辞抜きに週明けからトレーナー見習いとして、ベテラントレーナーのチームに加盟して学んでもいいくらいだと思う」

「言い過ぎです……アタシはまだそんな……」

「言い過ぎとは思わないが、とはいえよそのチームに送り出してしまったら、せっかく無

理を通して青田^{あおた}買^がいしてまでうちのチームに来てもらった甲斐がない」

俺の言葉に、居心地が悪そうな動きをしていたドーベルがあからさまにほっとした様子を見せた。

「ありがとうございます。せっかく高く買ってくれてますし、引き続きこのチームで頑張ってみたいです。マックイーンもいるし、趣味の方でわかり合えそうな同級生もいるし、頼りになりそうな先輩もいますし」

「そう言ってくれるとありがたい」

ゴールドシップ以外の他のメンバーが戻ってきたのは昼過ぎだった。連絡があつたのでゲートまで迎えに行くと、光に包まれながら存在が薄くなっている約一名以外は元氣になつていた。

「デジタルは大丈夫なのか？」

「おそらく」

すっかり悟り切った表情のネイチヤが溜め息をつきつつ述べた。

「まあ、ここまで来ることができたなら大丈夫か。ところでゴールドシップは？」

「『ちょっと激励げきれいに行つてくらあ』と言つて、選手控室がある方に向かいました」

「うーん？」

今回のダービーに出るゴールドシップの知り合いはオルフェーヴルしか知らなかったが、彼女を激励しに行くとも思えないし、他にもまだ知り合いがいるのだろうか。



「ようバリやん」

「……どちら様つすか？」

控室に続く通路で待つこと数分、静かに現れた彼女——どのループでも見慣れた、アタシ的には付き合いがとても長い『一つ上の先輩』に挨拶をしたら、訝いぶかしげな表情を向けられた。そう言えば、このループで彼女に面と向かつて会うのは初めてのことだった。

「ゴールドシップ。名前は来年にでも覚えてくれ」

「はあ……？ それじゃ、あたし用事があるので……」

「脚先^{あしさき}」

すれ違いざまに一言告げたところ、彼女が立ち止まって振り向いた。

「『なんでわかつたんだ？』って顔だな。答えは明日以降教えてやる。トレーナーにも言われるだろうが、テーピングは念入りにしとけ。今更走り込みをすることは思わねーけど、直前までできるだけ養生^{ようじよう}しろ。健闘を祈る」

「どうして」

「なんだ？」

こちらを見る彼女の顔には、不安そうな表情が浮かんでいた。

「……どうして、見ず知らずのあたしにそこまでアドバイスをくれるんすか？」

「バリが知らなくてもアタシが一方的に知っているから、だな。ま、ストーリー後半の大量敵キャラが偵察がてら敵に塩を送ったとも思ってたてくれ」

「そう、っすか」

質問をどうにかうまくはぐらかすことができた。

「あとはアタシの破天荒師匠の言葉をプレゼントだ。『ジnkスは破るためにある』っ

てな」

「ッ！……ありがとうっす」

丁寧な御辞儀おじぎをして彼女——ウインバリアシオンは去つていった。アタシが何度となく見てきた通りなら、彼女は高確率でオルフェーヴルに敗れるやぶ。そこを勝てるか、それともやはり敵かたわないのか、それだけはアタシにも分からない。ダービートライアルのひとつであるにもかかわらず、青葉賞を勝ったウマ娘がダービーも勝った事例は未だかつて一つの例も無く、今までアタシが過ごしてきた世界の数々でも前例はない。

勝てるか勝てないかは分からないが、故障だけはしてほしくない。これは少し先にアタシと同じレースを走つてもらわないと困るという、人生を懸かけたエゴであるとともに、七百年の人生でいろいろなウマ娘を見てきたからこそその感想でもあった。

「……がんばれよ」

もう遠くに去つてしまった彼女に向けて、小さい声で声援を送った。



『東京レース場、第十一レース。クラシックレースの最高峰、日本ダービーはまもなく発走となります。昨年トウインクル・シリーズや地方レースでデビューを飾ったウマ娘達・7458名の頂点を決する戦いに、十八名の選手が挑みます。季節外れの台風二号の影響により、ここ府中にも金曜日の夜から雨が降り続いています。バ場状態は朝から引き続き不良となっています。台風は先ほど四国沖で温帯低気圧に変わったのですが、雨には引き続き注意が必要です』

『不良バ場でのダービーはほとんど例がなく、直近だと一昨年がそうでしたが、それより前は何十年も昔の一九六九年、昭和四十四年まで遡ることになります。メジロ家の当代・メジロアサマが出走し、二十八人立て十六着、時の勝者はダイシンボルガードでした』

メジロを冠する名前の登場に、メジロ家の両名が背筋を伸ばした。

「まさかここでおばあ様の名前を聞くことになるとは」

「うん。でもダービーに二十八人……？」

「昔は出走者数がかなり多かったそうですわ。かつては三十二名が出走した回もあったのだとか」

「ええ……？」

マックイーンの語りにドーベルが目を丸くしていたその隣で、ゴールドシップは懐かしそうな顔で解説の声を聞き、小さく呟いた。

「そう言えばアサマ姉さんに長いこと会ってねえなあ。そろそろ五十年ぶりの挨拶でもしてえもんだ」

「どうしたゴールドシップ、何か言ったか？」

「あ、いやこつちの話だおっちゃん」

『それではパドックに集った選手達の紹介に移ります。一枠一番、ウインバリアシオン。十番人気です』

紅白のメンコ、赤を基調としたバレエ衣装風の勝負服の子が優雅に一礼し、目を閉じた。

『前走青葉賞で見事勝利し、ダービーへの切符を手に入れました。赤きソリストが古くから伝わるジंकスを打ち破ることが期待されます。……ファンから眠っているのではと心配されるほどの、目を静かに瞑って落ち着いている姿勢も健在です』

初手のウインバリアシオンは別格として、多くの選手達が雨の中堂々と挨拶をしつつも

緊張の色を隠せないでいる中、その雨も、緊張した空気もすべて吹き払うかのような輝きで王が顕現した。

『三棒五番、オルフェーヴル。一番人気です』

『皐月賞の勝者であることを証明する圧倒的な風格を感じます。インタビューではダービーの勝利もまた既定事項との宣言がありましたが、その宣言が現実のものとなりそうです』

「いや……すごすぎでしょ……まぶしすぎて目が潰れちゃいそう……」

「お、あ、ウマ娘ちゃ、じゃなかった！ ウマ娘様の威光、素晴らし——」

本当にまぶしそうに目を細めるネイチャの隣で、デジタルが魂を天に飛ばしかけていたので、肩を叩いて意識を戻した。

ダービーは、最終的には後方追込の戦法だったオルフェーヴルとウインバリアシオン、二人の争いになった。全員に後を追わせなかったオルフェーヴル、一度は先頭に立ったもののオルフェーヴルに躲かれ、そこから一バ身と四分の三遅れで二着に來たのがウインバリアシオン。勝利はこの二人で争ったようなもので、二着と三着との間は七バ身も離れて

いた。

季節外れの台風の影響による不良バ場という稀に見る悪条件など、己が前には添え物に過ぎないと言わんばかりの王、オルフェーヴル。その強さは、三着以降との着差によっても示されていた。ウイナーズサークルに先ほどのレースの疲れなど元々ないような振る舞いで立ち、傲岸不遜とも取られそうな堂々たる宣言を今回も行つたのを前にして、観客の多く、もしかしたらトウインクル・シリーズを走るウマ娘達の多くでさえも臣従しんじゆうの礼を執とつたに違いない。

ただ、王を前にして闘志を燃やす者の姿はまだまだ多い。その筆頭は、彼女のすぐ近くにいた。

ウインバリアシオンが観客席に向けて一礼し、オルフェーヴルに視線を向けた時に一瞬浮かべた苛烈かれつな表情、方向性が違えば殺意にだって見えるその激情に、王が少しだけ視線を動かしたように見えた。

レース場からの帰路、我がチームメンバーは全員沈黙していた。今までの七百年の間に何度もあるような勝負、あれそのものの勝負を見てきたはずのゴールドシップでさえも、何も語らなかつた。

寮の自室に戻り、今日の闘いを振り返った。

トレーナーになってから十年以上、ダービーのたびにその時々のチームの教え子とともに現地観戦をしてきた。同じ年にデビューしたクラシック級のウマ娘達——中央でトウインクル・シリーズを走るウマ娘達、そして地方で走るウマ娘達すべての頂点を競うため、選ばれた十八名による死闘とも言える競走は、いつ観戦しても心と身体が沸き起こる一方で、指導者のはしぐれとしては教え子が出ていなくても、その重圧を感じることもある。

今日のレースは、そうした7458名ものウマ娘達の頂点、オルフェーヴルがまさに王者たる圧倒的な強さを示した。その後方、二着になったウインバリアシオンは、泥にまみれ、悔しさをにじませ、オルフェーヴルを睨^{にら}んでいた。

勝負の世界の厳しさがそこにあった。たとえば全てのウマ娘より速く走れても、それを上回るウマ娘が一人でもいたら、勝てない。トレーナーとして、教え子が全力を発揮し、さらに勝てるよう、さらに研鑽^{けんさん}しなければならない。

特に今回、自分のところを集ったチームメンバーは過去に類を見ない素質があると感じている。自称七百歳で並外れた力を示しているゴールドシップはもとより、マックイーン

やネイチヤもそうだった。ドーベルは研修コース・トレナー課程所属であるから十分なデータは今のところはない。ただ、チームでの練習の時の観察眼は大変良いものがある。

「一年はダービーに始まりダービーに終わる」

トゥインクル・シリーズの格言を今一度心に刻み直し、チームメンバーの皆とともに、十何回目かの頂点を目指す旅を始めよう。

第八章 新潟千直、見えた力の片鱗

1 面白いレースがあるらしいダゴルシ

ダービーの時期あたりから最高気温が三十度を行き来するという、三十代にとっては十分過ぎるほどの異変な季節が始まって一か月半ほど。ようやく日付の方が天候に追いついて夏になった。トレセン学園は座学講義が七月上旬から一か月半ほど休みになるほか、八月のお盆の時期に事務部門の一斉休業が一週間ほどある。

一方、すでにデビューしたウマ娘とトレーナーの場合は、この時期に夏合宿があるし、学園から遠く離れたレース場まで遠征することもあったりして、基本的に固定の休みはない。ちなみに我がチームはまだ全員デビュー前のため、学園を拠点に週四日トレーニング、三日休みのスケジュールで活動している。

今日は水曜日。週の真ん中にトレーニングの休みを設定して、俺の方は日々溜まりがちな書類の山を片付けるためにトレーナー室に来ていた。冷蔵庫を開けて麦茶のペットボトルを取り出してカップに注ぐ。この麦茶の宣伝をする偉大な師匠に敬礼。あなたのおかげで多くのウマ娘やトレーナーが無事夏を乗り切れています。

ボトルを冷蔵庫に戻そうとしたところでトレーナー室の扉がガラリと開いた。

「おつす。おつちゃんお疲れ」

「ようゴールドシップ。今日も来たか。せつかくの休みだ、どこか別なところに出かけてもいいんじゃないか？」

「そうだなー、人生七百年、夏休みも百二十年は過ぎしてるしなー、今回はゴロゴロしててもいいんじゃないかねって」

「そうか。麦茶いるか？」

「いる。ついでに麦のジュースもあると嬉しい」

「書類上十七歳の生徒にビール飲ませたらクビになる」

ゴールドシップ用のマグカップを棚から取り出して麦茶を注ぎ、彼女に渡した。受け取るや否や一気に飲み干し、「おかわり」とカップを差し出したので追加で入れた。

「あんがとな」

「おう」

応接スペースのソファに座り、珍しく本を読み始めた姿を見て、先ほどの彼女の言葉を反芻した。
はんすう

人生七百年。かつて彼女が語ったところによれば、彼女はすでに何百回と世界を繰り返し、目の前の姿は十七歳の少女らしからぬ雰囲気かきを醸し出していた。

喋るときの口調や雰囲気は、一般の生徒やトレーナー、教官がいるところでは大変陽気な、あるいは不思議な、とにかくはじけた感じなのだが、自分しかいないようなときはどちらかと言うと今みたいな物静かな美人になっっている方がほとんどだった。彼女いわく『どっちも素の自分だけどな、あえて言うなら遠い昔の小さい頃のアタシは物静かだった』

とのことだった。

この雰囲気のことを他のトレーナーや教官、チームメンバー以外のウマ娘達に話すと本気にしてくれないどころか、トーセンジョーダンに至っては『マジ？ そんな姿ゴルシが超絶不調で死んだるときしか見たことないんだけど？ 何か悪いんじゃない？ 病院連れてけ』とガチトーンでアドバイスされた。

そういう不思議な彼女に偶然出会い、謎の事象から解放するために協力を始めたのが今春のこと、ようやく仲間を集めてトレーニングを始めたばかりだ。計画を進めるためにもまずは目の前の仕事に取り組まねばならない。パソコンを広げ、机の片隅に積まれた書類を手にとって読み始めた。

最後の書類を処理済みのトレイに置き、顔を上げて部屋の時計を見ると、もう一時間半が経過していた。静かで割り込みの仕事が入らないとかなりさくさく進められるものだ。

俺の仕事が一段落したのを察知したのか、ゴールドシップが声をかけてきた。

「おっちゃん、たまには曲がらず一直線に走るのもいいと思わね？」

「どうした急に」

学園の名物ウマ娘、カルストンライトオのようなことを述べ始めたので訝^{いぶか}しんでいると、そのきつかけを話してくれた。

「この前の日曜さ、テレビでレースの中継見てたんだよ。新潟の『アイビスサマーダッシュ』、あれ面白そうじゃねって」

アイビスサマーダッシュ。GⅢ級のレースのひとつで、その特殊な施行条件ゆえに根強いファンが多くついている。新潟レース場だけに存在する芝コース・直線千メートル、通称『新潟千直^{にいがたせんちよく}』をスタートからゴールまで一直線に駆け抜ける。まわりのウマ娘達との駆け引きよりも、自分がどの位置を走っているかによるレースの組み立てが一層重視されるというレースだ。

千直を使うGⅢ以上のレースはこのアイビスサマーダッシュだけ、そもそも千直で施行されるレース自体も新潟レース場でしか設定できないのもあって、年に十数レース程度しかない。アイビスサマーダッシュは夏合宿のさなかに開かれることもあり、参加するウマ娘やトレーナーはあえてここを選択して来るわけで、選手達の気合の入り方は重賞の中でも屈指の存在だった。短距離組は必ず千直に出すという名物チームトレーナーも学園にいる。

「チーム揃って直線番長になろうぜ！ 打倒ライトオ！」

「ツワモノに挑む意気込みは上々だが、打倒するなら距離適性も考えないとな」

レースやウマ娘に宿命的について回る問題の中で最大のものが距離適性だった。うちのチームにいるメンバーは揃って中長距離適性が高く、短距離については適性Gの評定、レースに値する走りはできないとされていた。メインメンバー以外に範囲を広げても、トレーニング課程からトレーナー見習いという名目でチームに呼んだメジロドーベルが、基礎体力テストでマイル適性があるとされているくらいだった。もちろん彼女はレースのためトレーニングはしていないので、来週、再来週でいきなり走ることはできないし、短距離適性はそもそも無いとの判定だった。

「うちはみんな短距離適性がないから、千直体験や基礎トレーニングにはなっても、レースや実戦トレーニングにはならないな」

「だよなー、アタシひとりだけレース並みに走ってもなー」

「そうそう……ん？ ゴールドシップも短距離適性はGだろう？」

「チツチツチ、この七百年モノゴールドシップ様を舐めちゃいけない。七百年のうちにありとあらゆる距離の修行をして、鍛える前でもある程度までは走れるようになった。学園

の基準ならアタシの今の短距離適性はAだな」

「ええっ!？」

「お、一発ギャグか？ 多分ネイチヤとルドルフくらいだぞそれで爆笑してくれるのは」

「ギャグは全く考えてなかったんだが。しかし適性Aだともう立派な選手だな。短距離の子達がみんな泣いて辞めてしまうから秘密にしないと」

「んだ。アタシもできるだけ隠しておきたいから利害一致だ」

トレナーとしては、目の前の規格外なウマ娘をありとあらゆる距離のレースに出して、誰も成し遂げていない全階級制覇、言うなれば『全冠』を獲^とらせたいという野望が思い浮かばなくもなかったが、通常ではおよそ考えがたいローテーションを組むことになりそうだし、指導するだけの実力が足りない。何よりゴールドシップも望んではない。ならば、ここはいつそレクリエーション程度の位置付けで走るくらいがいいかもしれない。ひとまず、どのような直線コースを希望するか訊いてみた。

「直線コースだが、どのくらいの長さがいい？ 学園のコースで頑張れば四百メートルくらい、合宿施設や他のレース場でも五百メートルだから、千メートル取れるのは新潟だけだな……何メートルがいい？」

「千。芝コース」

「だよな」

ゴールドシップがわざわざ言うからには、普段のトレーニングでも走れる五百メートルくらいの直線で満足するはずがない。そして芝を希望するからには、九十九里浜みたいな砂地を一直線に走っても満足はしないだろう。

「平日前半ならトレーニング向けにレース場のコースを貸してくれる制度はあるらしいな。やるか？」

「おう！」

新潟千直を借りる件はたづなさんにお伺いを立ててみることにして、ゴールドシップにふと気になったことを尋ねた。

「さっき短距離適性がA相当だって言ってたが、それだと本来得意な長距離はどうなるんだ？」

「評価レベルがSでもSSでも足りないな。勝手に作るならUSA＋＋くらいか」

信じがたい自己評価だった。まだチームトレーニング程度ではゴールドシップの本当の能力を測れていないことは承知しつつも、やはり額面通りに受け取ることとはできない

かった。

「文字で書いたらUSOみたいに見えるな。嘘みたいにしか見えない」

「んだとこのやろー」

ゴールドシップがにこやかな表情のまま立ち上がってこちらに向かってきて、背中にしにかかるようになって首にロックをかけてきた。

「ぐええええ、ギブ、ギブ……」

「アタシはモーレッツに怒っている、罰を食らえろガハハハハ！」

腕を叩いてギブアップを宣言したら締め付けはゆるくなつたが、完全には離してはくれなかった。もちろんそのような体勢になっていると問題がある。

「離してくれ」

「なんだよ、極上のゴルシちゃん枕が気に入らねえのかよ」

頭上からかうような声が聞こえてきた。

「ノーコメントだ。具体的なことを言ったが最後、たづなさんに処刑されてクビだ」

「そうだな！」

そう言うのと、今度は椅子をくるりと回して正対させ、真正面から抱きしめてきた。彼女

が言うところの極上枕あたりに強制的に顔を埋めることになってしまった。

「じゃあ黙って堪能しやがれ。日頃の礼だ」

いくらオッサンと人生経験年数七百歳のペアでも、立場上は議論の余地なくアウトだ。トレーナーとウマ娘の間にはまれによくイロイロと色に関わる沙汰さたがあるので、綱紀肅正こうきしゆくせいのお達しが季節に一回来る。特に夏。このままこの姿を誰かに目撃されるとまずいかもしれない。

がつちりホールドされていて全く動けない状態で、これ以上のセクハラ事案にならないよう心頭滅却しんとうめつぎやくしてただひたすら固まっていると、不意に部屋の入口の方から物音と声があった。

「失礼します。……あの、白江トレーナーとゴールドシップさん？」

「おうたづなっち、今いい所だから後にしてくれよな！」

とんでもないことを言い始めたゴールドシップ相手に抗議をしようとしてモガモガ声を出していると、全てを察したらしいたづなさんが優しく確実にゴールドシップを引き剥がしてくれた。

「ゴールドシップさん、トレーナーさんを困らせないように！」

「へーい」

たづなさんが来てくれたついでに、新潟レース場のコースを借りる計画と、それに合わせた合宿計画について話した。

「分かりました。UR Aと新潟レース場への手続きは私が担当しますので、のちほど申請書類に必要事項を書いて私宛てにメールで送ってください」

「ありがとうございます」

たづなさんが出て行った後、また距離をゼロまで詰めようとしたゴールドシップを押しとどめて軽く説教した。

「女子高生なんだから変なことをするんじゃない」

「変なことって何のことだ？ ……なんて言わせねえよ。分かってるって。ちゃんとアタシを守るべき生徒として扱ってくれるのはありがてえよ。惚れ^ほそうだ。トレーナーと生徒の関係じゃなけりやおつちやんに結婚を申し込んだたかもな」

「恋愛未経験のオッサンを煽^{あお}るな。あとゴールドシップには別に好きな子がいるだろ」

「そうだな。確かに浮気はいけねえ。ここのベルちゃんとも、まあ、少しずつ関係は築けてるしな。……まあ、日頃のねぎらいみたいなナントカカントカだったらここのベルちゃ

んもあのベルちゃんも許してくれるさ」

それからまたしばらくゴールドシップが静かになり、その間に俺は申請書類の下書きを始めた。始めて少ししたところでたづなさんからメールが返ってきた。

「お、たづなさんから早速返事が来たぞ。『チーム合宿は最大半月までなら許可が出せます』だそうだ。千直を借りられる日程も来てた」

「希望日数ならもう聞いたぞ。みんな『一週間くらいがいい』つてさ。デジたんは『誠に申し訳ないのですが原稿が大詰めを迎えており、集中して作業せねばなりませんゆえ不参加で……』だつてよ」

「もう連絡回したのか、早いな。ならそれで申請内容を打ち込んで……はいよ。明日くらいには正式回答が来る」

「ありがとな」

自分から離れたゴールドシップは、今度は近くのミーティング机の椅子に座つてこちらを見てきた。いつものニヤニヤと何かを企たくらんでいそうな笑顔ではなく、穏やかな笑顔だった。

「ちようど昼になったな。何か食べに行くか」

「フードファイトしようぜ！」

「俺の胃と財布が死ぬ。オグリかスペシャルウィーク、ライスに付き合ってもらえ。間違ってもマックイーンを連れていくなよ。ドーベルが『マックイーンは……その、食べた量に影響されやすいから……』って言いにくそうに教えてくれたから」

「よしマックちゃんにパフェ食わすか」

「そうか……ならさっきのいい笑顔の写真をマックイーンとドーベルに」

「まあ待つんだおっちゃん、アタシとおっちゃんは話し合いで友好関係を築いてきた。これからもきつとできると信じてるぜ」

「変わり身が速い」

「間違いは三秒で直すもんだ」

やはり優しい笑顔は対外的イメージに合わないと思っているのか、毎回写真送信を阻止される。ちなみにマックイーン宛てにはさっきの発言の前に送ってしまった。ゴールドシップとやいのやいの言いながら、どこに行くかを考える。あまり調子に乗って散財すると来週の遠征に差し障りが出るのでほどほどにしなければ。

2 遠征前重大インシデント

翌週月曜日、朝から参加者五名を引率して府中から新宿、大宮と移動して新幹線に乗り、一直線に新潟へ来た。

「はーるばる来たぜ新潟アアアアッッッ！……！」

「わー」

ゴールドシップの叫びが疲れの抜けきらない頭にダイレクトに突き刺さる。他のメンバーが特に反応しないので、気の抜けた返事を一人で返したら背中をバシバシ叩かれた。

「なんだよおっちゃん元気がゼロじゃねえか」

「一部メンバーが週末を終末にしてくれちゃったからなんだが」

反射的に低い声で唸^{うな}ってしまつたところ、その当該三名——ゴールドシップ、メジロマツクイーン、ナイスネイチャが背筋から耳から尻尾からピンと一直線に張った状態にな

り、直角を通り越した角度まで頭を下げた。

「「その節はまことに申し訳ございませんでした」」

その様子をメジロドーベルが苦笑いしながら、また、顛末について何も知らない我がチームのゲスト・ホッコータルマエさんが困惑しながら見ていた。

☆ ☆ ☆

先週水曜日に新潟レース場の芝千メートル・直線コースの利用申請を出したところ、その日のうちに利用許可の通知が来た。その事を翌木曜日のチーム練習の時に全員に伝えたら、初のチーム遠征ということでもみんな大変盛り上がった。盛り上がり過ぎた。いや、正確には俺は事後に知ったから「盛り上がり過ぎた『らしい』」だった。

金曜日朝八時、出勤して一息入れたところでたづなさんがトレーナー室にやって来た。困り果てたような、朝から疲れきったような様子がありありと感じられた。

彼女に促されるまま理事長室に行くと、理事長も今まで見たことがないやつれ方をしていた。いろいろと可能性が脳裏によぎる。俺が出勤してからの呼び出し、そして二人とも

慌てた雰囲気はないので誰かの事故や重大な事件ということはないのだろうが、あまりろくな話でもなさそうだった。

「何事でしょうか」

「驚愕……、今朝、君のチームの生徒がなぜか奥多摩で救助されたとの連絡が来た」

「はい??」

何が何だか全く分からないので、横のたづなさんに視線を向けると、たづなさんも魂が抜けそうな感じの力のない表情でこちらを見た。

「ゴルドシップさん、メジロマックイーンさん、ナイスネイチャさんとのことです。第一発見者の方いわく、全員が奥多摩の駅前に倒れ込んでいてぴくりとも動かなかったの
で、事件か事故か、とにかく助けなければと救急車を呼んで、それが三人分、そして念のためパトカーも招集されました。学園には朝七時半頃に第一報が入って、はい……」

何やらとんでもない事態だ、すぐに行かねばと腰を浮かしかけたが、一大事のわりには二人とも慌ててはいなかったことに改めて気付いて腰を下ろした。

「それで彼女たちは」

「全員意識を回復しました。……いえ、単に『よく寝た』ということでした……トレー

ナーさんに緊急連絡を入れようとしたら、その後すぐにこの第二報が入って、それでトレーナーさんへの連絡が遅くなつてしまいました」

健康上の問題が無かつたようなのでひとまず胸をなで下ろした。

「ありがとうございます。うちのメンバーがご迷惑をおかけしました」

「いえ、みなさん無事で良かったです」

三名が担ぎ込まれた病院に迎えに行くため、車を出そうと立ち上がったところであつたさんから仕事の依頼があつた。理事長とたづなさんが早朝からヘトヘトになるまでに駆け回つて、無駄に朝のニュースに流れてしまう事態を防いだので、あとは本人達からの事実確認と、事件に関する顛末書^{てんまつ}の提出をよろしく、とのことだった。いたつて当然な仕事の要請にただ頷く^{うなず}しかなかった。

とりあえず三人にメッセージを入れて車を走らせ、病院までは三十分ほどで着いた。ちようど検査を終えて出てきた、気まずそうに目を逸^そらすゴールドシップ、マックイーン、ネイチャを乗せて学園まで帰つてきた。車の中は終始無言だった。最初は自分の方からいくつか世間話を振つたものの、みんなの返事がとても力無いものだったので、結局沈

黙することになった。

学園に戻って来て、チームトレーナー室に入るやいなや、三人全員が一斉に五体投地で土下座した。

「すみませんでした！！！！」

「説教と、学園に出す顛末書を作るために話を聞かねばならん。長くなりそうだからあちらのソファへ」

「はい……」

ゴールドシップいわく、最初はここにいる三人とドーベルの計四名で学園の外周を少し流すだけのつもりだったらしい。しかし、ゴールドシップとマックイーンが張り合い始め、ネイチヤが間に入ろうとしているうちにどんどん加速して、ドーベルを置き去りにして行ってしまった、らしい。

「わからん。そこからどうやって奥多摩で全員揃って倒れるところにつながるんだ？」

その疑問にはネイチヤが答えてくれた。

「恥ずかしながら、みんなしてハンガーノックになってしまったんだと思います……ゴルシとマックイーンに追いついたと思ったら、急に力が抜けて、もう次の瞬間が病院のベッ

ドの上でした」

ゴールドシップとマックイーンもその言葉に半ばうなだれるように頷いていた。

「ドーベルからたくさん来ていたメッセージを読んだのが、今朝私達が病院で検査を受けた後のことです」

「ベルちゃんからのメッセージに返事をして、それからすぐおつちゃんが迎えに来てさ」
そして今に至る、ということだった。

ここでふと疑問が思い浮かんだ。

「そう言えば、学園から奥多摩駅まで五十キロ近くもあるんだが、まさか本当に最初から最後まで走って行ったのか？途中で電車を使ったりということもなく？」

「そのまさかだ。まわりが見えなくなるとよくねえな」

アスリートの強靱さ、とりわけトウインクル・シリーズに出るだけの力が見込まれているウマ娘のフィジカルの強さを感じる。

「人間のフルマラソンくらいの距離だから、ステイヤー寄りのウマ娘なら走れなくもないことは理解はできるが、でも三人揃ってか。ネイチャはどうしてあそこまでついて行ってしまったんだ？」

「こう、闘志が湧いちちゃったといいますか、自分でも分からないんですけど……」

「なるほど。ひとまずそのような経緯だったと顛末書には書いておこう。それで、ドーベルには学園に帰って来たって連絡したか？」

「……まだでしたわ」

「ずいぶん心配しているだろうし、すぐに連絡を」

シュンとしたままの三人にお茶と、以前マックイーンがトレーナー室に隠していたお菓子を出した。マックイーンの表情が一瞬曇ったがすぐ元に戻った。もくもくとお菓子を食べ、お茶をすする様子を見ながら顛末書について少し考えた。

顛末書の中身の前半は決まったが、それに加えてさらに今後の指導時の注意事項も添えないといけない。トレーナーを何年もやっている、指導する生徒が起こしたトラブルやアクシデントに関する書類作りにはだいたい慣れるが、毎度のことながら今後の方針記載には苦勞する。通り一遍の定型文を並べただけではたづなさんが受け取ってくれない。指導する生徒それぞれの特性を見て考え、これからしていくことの要点を書いてください、とのことだった。まさしく当然のことである。

思考を巡らせているうちにトレーナー室のドアが勢いよく開けられ、ドーベルが飛び込

んできた。肩で息をしているから、メッセージを受け取るや否や全速力で走って来たに違いなかった。

「マックイーン！ 大丈夫!? ゴールドシップさんとナイスネイチャさんも」

「え、ええ……幸い。心配をかけてしまつてすみません」

「わりい。ちよつとアツくなつてさ……」

「ごめんね……」

三人の返事を聞いたドーベルが歩み寄り、まずマックイーンの両頬りようほおをつねり上げた。

「ひはいれふ！ ほへんはいひゆひゆひれくらはいはひ！」

おそらく『痛いです！ ごめんなさい許してくださいまし！』だろう。ドーベルが真顔でマックイーンの頬をつねったまま前後上下左右に動かしている。少々おかしいかもしれない。マックイーンが涙目になったところでようやく解放され、次はゴールドシップの前に来て、少しふくれっ面をして怒った。擬音をつけるならまさしく「ぶんぶん」かもしれない。

「心配しました。すごく」

「すまん」

「先輩ですし、はっちゃけるなとか、上から説教する気はありません。ただ、無茶はしないでください」

「ああ……」

そこまで言うと、ドーベルの顔にふと不安そうな表情が浮かんだ。

「なんか、ゴールドシップさんが遠く離れると、そのままどこかに行ってしまいそうな感じがします」

「ごめんな。変なことはしねえって約束するから」

「約束ですよ？」

マックイーンの時とは違って甘酸^{あま}つばさ半分、なぜか妙にしつとりした雰囲気半分といった様子に、俺は心身とも溶けて消えてしまいそうになった。この何か恋愛愛的なものを感じなくもない波動は少々身にこたえる。

最後にドーベルはネイチャの方に向かって、困ったような笑みを浮かべた。

「ネイチャさんお疲れさまでした。マックイーンが迷惑を掛けてごめんなさい」

「あ、いえ、ごめんね、……アタシも全然止めらんなかったし」

「わかります。マックイーンは結構熱血ですから」

ひとまずみんなを食堂に送り出し、実質的には指導計画書と言える顛末書をゴールドシップとマックイーンの二人分、ネイチャについては簡単な説明を入れた書面を作った。づなさんに出しに行った。幸い一回で受理されたので、あとは大丈夫なはず。四名がまた戻ってきたので、今日はいろいろ休みということにして解散した。

その後特に呼び出しは無かったが、学園内を歩いている時に同僚のトレーナー達から冷やかされたり、心配されたりした。

「お前、なんかすぐく大変そうなチームになっちゃったんじゃね？ 異次元に行く予測不可能なビューティフル・ハジケリストと、ただでさえ恐れ多いやんごとなきお嬢様方が一緒にいるとか、俺なら担当着任初日に胃潰瘍いはいようで入院することになるな」

「そうか。ゴールドシップは実は意外とおとなしいって聞いたら驚くか？」

「またまたご冗談を。おとなしい子は奥多摩まで走って行ってチームメイトもろとも倒れてたりしないかな？」

「そうかもしれない」

無理すんなよ、と肩を叩かれて同僚と別れ、思いきり後にずれてしまった他の書類の処

理や、新潟遠征のトレーニング計画をしていたら金曜日が終わり、片付かなかった仕事と来週分のうち早めに処理すべき仕事を土曜日に片付けていたら一日が消えた。日曜日もなんだかんだであつという間に過ぎた。

☆ ☆ ☆

新潟駅からはそのまま新潟レース場に直行して、レース場内の宿泊施設に荷物を置いてまずはみんなをコース全体が見渡せるスタンドに連れて行つた。

「すげえな、あれが千直かー」

「どこまでも真っ直ぐなコースを見るのは初めてですわ」

「確かにこれは走ってみたくなるねえ。まあ、アタシ達は揃つて中長距離向きだから本物のレースみたいには走れないけど」

「すごい……」

「私としてはダートコースの千直もほしいですね……」

みんなすつかり見入ってしまった。

「このゴルシ様が千メートルを一万メートルみたいに走ってしんぜよう。フオツフオツ
フオ」

「それって長距離みたいな走り方をするって話？ それとも千メートルでも長距離みたいなぶつちぎりの勝ち方をする？」

「よい質問だネイチヤ君。ま、見てのお楽しみってことで」

「はいはい。それで、ドーベルさんはどうする？ 千直走る？」

「はい。せっかくなら少しは走ってみようかなって」

ドーベルはトレーナー課程ゆえ、全力で走るための訓練は特に受けてはいない。それを踏まえて、今日は走りに慣らしていく感じのトレーニングを行い、実際に千直を使うのは明日にすることにした。

実際のコースでのトレーニングを二時間程度行い、夕方は夕食も兼ねてレース場から中心市街地まで繰り出した。今回行った先の店は、さすがレース場が近い街ならではの光景としてウマ娘向けの料理コースに通常版の他にスタミナ増強版と究極版なるものが用意されていた。今回はみんなウマ娘向け通常版を選んだが、好奇心から究極版の中身を聞いてみたところ、それを食べ切れそうなのはスペシャルウィークとオグリキャップくらいなの

ではというくらい超級ポリウムな代物だった。

「いやー食った食った、腹ごなしにレース場までランニングしてもいいくらいだな」

「……ゴールドシップとマックイーンがまたフルマラソンの距離くらい走ってしまいうんじやないかと疑っている。あんまり遠いと迎えに行けないし、今度は俺もまとめて処分される」

「いやさすがに先週からの今日でそれはやらねえよ」

「ゴールドシップさん、大人しく帰りますわよ」

「まあ、この時間はレース場まで行ってくれるバスが無いから、電車で近くまで行ってそこからランニングするくらいならいいぞ」

「わかった。おっちゃんはどうするんだ？ 一緒に駅から歩くか？」

「さすがに辛い。タクシーで行く」

「アタシが背負って行ってもいいぞ。あるいはお姫様抱っこ」

「やめてくれ。俺が不審人物として地域中に御触書が回る」

「気にすんなよー」

やけに絡んでくるゴールドシップをマックイーンとともに押して行って新潟駅までのバ

スに乗り込み、そこからは電車、さらに最寄り駅からはランニング・タクシーでレース場まで戻った。チーム一行はちよつと広めの五人部屋に泊まり、こちらは個室。ちよつとしたビジネスホテルのような部屋が実質無料で使えるのはありがたかった。

大浴場で汗を流し、部屋に戻ってベッドに寝転がったら、心地良い疲れもあつてかあつという間に眠ってしまったらしく、朝まで目が覚めることはなかった。

3 千直模擬レースの異変

翌火曜日の朝、我がチーム一同は一直線に延びる千メートルのコースに立っていた。

「観覧席から見ると、実際に見るのとはだいぶ違いますわね。コースに立つと距離以上で果てしなく続いている感じがいたします」

「瞬発力トレーニングに使うコースの十倍はあるよね。しかもきちんとした芝コースだし」

「マックちゃんにネイちゃん、アタシに勝ったらいいもん奢るぜ？」

ゴールドシップがニヤニヤしながら勝負を持ちかけていたが、二人は揃って首を横に振った。

「ゴールドシップさんは私達の距離適性をご存じでしょう？」

「おう。マックちゃんが短距離GのマイルF、ネイちゃんが短距離GでマイルC、ネイちゃんはアタシと同じだな。みんな短距離はG評定なんだから条件は同じだろ？」

「……何か隠していますわね？」

「そんなわけねーでございますでしてよオーツホッホッホ！」

胡散臭^{うさんくさ}すぎる返事にマックイーンは疑い百パーセントを載せた目でゴールドシップを睨^{にら}んだ。その疑いは正しい。本人いわくゴールドシップの本当の短距離適性はAだった。本気を出せばここにいる全員を置いてけぼりにして走り去ってしまうのは確実だ。

「まあ、無理のない範囲で試しに走ってみるのもいいんじゃない？ タイムはボロボロになると思うけどさ」

「はあ。そういえばドーベルとホッコータルマエさんはいかがしますか？ ドーベルは昨日は走ってみるとのことでしたが」

マックイーンの問いに、ドーベルはうなずき、ホッコータルマエさんは首を振って応じた。「アタシは走ってみようと思う。トレーナーをするには、コースの様子を体感するのはいいことだと思うから」

「私はさすがに無理です……コース適性が完全にダート寄りって春の初期適性テストで出ましたし……」

「ベルちゃんは短距離EのマイルAだったよな。このチームだと一番いい成績になりそうだ」

「そう、でしょうか。でも走るトレーニングは全くしていませんし」

「基礎トレーニング程度の力で無理なく走ればいいんだぜ」

「わかりました」

メンバーがストレッチをして身体の準備を整えたのを見届けて、ホッコータルマエさんとともにゴール側に移動した。

通常の周回コースでのトレーニングと違って、千直はスタートとゴールが文字通り千メートル離れている。スタートを見た後にショートカットしてゴール地点へ先回りする芸当も使えない。そこでレース場にある簡易スタート合図器とコースパトロールビデオシス

テムを使わせてもらうことにした。

トレーニングでスターティングゲートを使うまでもない時には、ブザー音で遠くからスタートの合図を送る。コースパトロールビデオシステムを使うと、みんなが走っている状況をリアルタイムで見ることができる。以前学園でも使ってみたが、その時もレースの振り返りに有用だった。

マイクを持って、簡易スタート合図器のスピーカーから全員に呼びかける。

「全員準備はいいか？」

『オーケーだぜおっちゃん』

ゴールドシップからの応答を聞き、スタートボタンを押した。第一カメラに映っていた四人が一斉にスタートした。

この新潟千直のレースは一分もかからず決着し、GⅢのアイビスサマーダッシュとなると五十三秒台で勝利する選手もいると聞く。今回は距離適性外のメンバーだらけだから、ゴールドシップ以外は一分前後でゴールラインに到達すれば上々かもしれない。コースパトロールビデオシステムが自動でラップを刻んでいるが、通過タイムは短距離選手に比べると一秒は遅く、いわゆる「勝負にならない」というものだった。もつとも、勝負になる

タイムが出たらうちのチームは短距離戦に鞍替えした方が良くなるが。

ゴールドシップは意外と他のメンバーと変わらない速度で走っていた。あれは意図的に全員と足並みを揃えているのか。

レース中盤、ゴールドシップが本気を出し始めたのか、一人先に出た。それに応じるようにネイチャとマックイーンの速度が若干上がった。中長距離戦でなら今のタイミングで加速するのが適切だが、短距離戦だと致命的な遅さとなる。

そしてドーベルも集団に食いつき——なんとネイチャとマックイーンよりも進出してゴールドシップについていった。

ゴールドシップが自称する適性とドーベルの初期適性が高いゆえか加速力があり、中長距離組とほとんどん差が開く様子がカメラに映り、ラップタイムにも差が出てきた。そして、ゴールドシップとドーベルが競り合うように前に出た姿が第四カメラに映るとともに直接見えた。

その十秒後、ゴールラインを二人が通過し、遅れること二秒でネイチャとマックイーンも通過した。

システムによるゴール判定の結果、一着はゴールドシップだった。途中まで全員と揃っ

て走っていたにもかかわらず、後半に規格外の加速を見せて昨年のアイビスサマーダッシュのレコードと同じタイムを叩き出していた。とんでもない存在だ。この記録は必ず秘匿しなければならない。

そして、二着のドーベルはハナ差判定と出た。

少し離れたところで呼吸を整えているゴールドシップが一瞬こちらを見た。そこに浮かんでいたのはどちらかと言えば困惑だった。おそらくはドーベルの、レースどころかレース向けトレーニングも未経験の中等部二年生とは思えないほどのあまりもの速さに。横でその結果画面を見ていたホッコータルマエさんも絶句していた。

「トレーナーさん……？ ゴールドシップさんとドーベルさんの記録って……」

短距離の現役選手と全く同じレベルじゃないか。そう表情が語っていたので、軽く手を挙げて制止しつつ口止めをした。

「少し方針を考えたい。この結果はちよつと秘密で頼む」

「……わかりました」

コースに座り込んだチームメンバー達のもとにホッコータルマエさんともども歩み寄り、スポーツドリンクとタオルを手渡した。

「ふう、生き返りました。トレーナーさん、タイムは何秒でしたか？ おそらく散々な数字だとは思いますが……」

「全然仕掛けるタイミシングが分からなかったというか、思ったよりもゴールが近すぎてスパートが間に合わなかったというか……アタシはやっぱ距離がほしいですねえ」

「まあ、やはり二人が中長距離向けだということが分かる結果だったな」

マックイーンとネイチヤに対する具体的数値の返答はうまくはぐらかすことができた。

もしタイムを伝えてしまうと、おそらくゴールドシップやドーベルのとてもないタイムを頭の中で弾き出してしま^{はじ}うに違いなかった。まだ先着した二人の能力をどう活かすべきか決めていない以上、今はまだ秘密にしておきたい。

クールダウンをさせ、さらに涼しいところへ退避するために全員を建物の中に連れていき、休憩時間とした。他のメンバーが一旦部屋の方へ戻る中、ゴールドシップがこちらにやってきた。かなり接近して、小さい声で話し始めた。

「おっちゃん。ベルちゃんのタイムはどう思う？ アタシのタイムは去年のアイビスサマーダッシュと同じくらい出ていたはずだ。ベルちゃんはその後ろ、たぶんハナ差だったろ？」

「タイムも着差も全部その通り。ドーベルがこれほど走れるとは思わなかった」

「そりゃあ距離適性こそ違えど、別の世界でGⅠはを五勝できるレベルだからな」

「本人は気付いてそうだったか？」

「いや。走るのに必死で何も気付いてないはずだ。まだ入りたてだし、自分の中でタイムを測る技も持っていないと思う。アタシのことは言いふらしている通り長距離専門だと思ってるだろうし、短距離でも適性Aレベルで走れることも知らないはずだが」

「……正直、トレーナー課程にるのが大変惜しい。出走させたくなくなってきた」

「だな。とはいえ、それをやるとアタシの力をバラしてしまうことにもつながる。タルタルが誘導尋問に引っ掛かるかもしれないし、アタシのタイムを知ったらマックちゃんやネイチちゃんもすぐに気付かかねない」

「帰ってからもうちよつと考えよう」

「そうだな」

午後は室内での基礎トレーニングを行い、トレーニングの理論に関する簡単な講義とアドバイスをした。ドーベルにも選手の筋肉の使い方を知るとの建前で、レース向けトレーニングの内容を伝えた。

講義後、部屋で一人になった時にひとつの方向性を立てた。もしこの先、ドーベルを面倒な手続を経てでもトウインクル・シリーズに出走させることにした時、あるいはドーベル本人が方針転換を希望した時にすぐに対応できるように、準備を進めておくことにした。

4 緊急サシ呑み（ダメです）会談

千直の模擬レースでの衝撃的な『事件』の後、水曜と木曜に行ったトレーニングでは我がチームは上々の成果を得ていた。週末の新潟のレースに出走するために来た選手達とも基礎トレーニングや併走を一緒にできたので、実戦につながる経験も得ることができた。やはり、実際にレースに出る選手を近くで見ることが重要だと感じた。

本当なら土曜午前くらいまで滞在して、実際のレースを一、二本見るのが教育的効果からも良さそうだと思ったが、学園に提出している遠征計画を変更するのが少々大変なので、明日には東京にみんなを連れて帰る必要があった。

あるいは杞憂きゆうかもしれないことを言えば、今度の土曜日は千直を使うレースが珍しく午前中に設定されているので、あれを見てゴールドシップ以外のメンバーが火曜日の結果の異様さに気付いてしまわないかが心配になったのもある。

それはさておき。最終日なので少し地元の日本酒を試してみようと思つて、新潟で生まれ育つたというレース場のスタッフさんにおすすめの銘柄を聞き、微びに入り細さいを穿うがつようなアンケートを経て勧めてくれたものを売店でひとつ買った。ひとまずは二合瓶で楽しみ、明日の帰りに新潟駅のあたりで大きめのものを買って帰ろうと思う。

風呂上がりには自室に戻り、冷蔵庫から取り出したお酒と一緒に買ったお猪口ちよこにまず一杯注ぎ、そして目の前に差し出されたお猪口にも一杯注いだ。……あれ？

視線を上げると、長髪をゆるくまとめた浴衣姿の美しいウマ娘がいた。思わず見とれたが、三秒ほど経つてはたと気付いた。

「ゴールドシップ。しれつと酒を飲もうとするな」

「ちつ、気付かれたか」

「見事に温泉旅館でくつろいでいる姿だな」

「おっちゃんこそ」

「まあ、な」

新潟レース場付属の宿泊施設の個室は結構豪華で、自分が選んだ和室スタイルの部屋は完全に旅館の一室のようなつくりになっていた。その広縁のところで、ゴールドシップと向かい合うような形で座っている。いや、ひとりくつろいでいたらいつの間にかゴールドシップが来ていた。

「扉の鍵は？」

「開いてたぞ。ここはオートロックじゃないからな」

「鍵のことはすっかり意識から抜けていたな」

いつも泊まるビジネスホテルはほとんどオートロックだったので、鍵をかけることをほとんど意識しなくなっていた。

「おかげで鍵職人ゴルシちゃんの出番が無かったぜ」

「鍵を道具で開けようとするな。そういう時は普通にノックしろ」

「だよな」

ゴールドシップが屈託のない笑顔を見せ、おもむろにお猪口の酒を飲み干した。

「おい」

「飲んじまったもんは仕方ねえ、実年齢七百歳ってことで許せ」

「バレたら俺がたづなさんからお小言を頂戴する羽目になる」

この場には当事者しかいないが、どちらかが何かの拍子にうつかり喋ってしまったらあまり良くない。

「そんな時はアタシが目潰したそのスキに酒をラッパ飲みしたって言え」

「……まあ、お小言は平身低頭して頭の上を通すことにするか」

「そこはきちんと聞いてやらねえとたづなっちが泣くぞ？ ……灰色なところをうまく丸めるところが大好きだぜおっちゃん。清濁併せ吞む^{せいだくあわ}のやつか」

「お小言を聞き流すなんて、清濁併せ吞むとかそんな大層なもんじゃない」

「いいんだ。それを大層なことじゃないって言える姿勢で助かるやつもいる。アタシみたいな奴とか」

口調こそあつけらかんとしたものだったが、表情は今までにいろいろな経験したであろうこと、とりわけ心に傷を負うものがたくさんあったことを物語っていた。目の前のゴールドシップは見た目上は学園の生徒、こちらは一応指導的立場にあるトレーナーだが、人生

経験があまりにも違い過ぎる。人生三十年かそらの人間に推し量ることができない物事はあまりにも多い。せいぜい話を聞くことくらいしかできない。だから、そのことをできる限りしたい。

「こんななりでも人助けになつてゐるなら何よりだ。もう一杯いつとくか？」

「さすがにトレーナーが勧めちまつたらクビになるぞ。おつちゃんにはアタシの野望実現まで一緒にいてもらわないといけないからな」

「じゃあ自分で飲むか」

お猪口にまた一杯。非常にいい風味で飲みやすい。この調子なら、もし一升瓶があつても丸ごと飲み干せそうだと思つたが、そう感じるお酒は底無し沼だ。このあたりにしておこう。

「時にゴールドシップ」

「……ベルちゃんのことか」

「話が早くて助かる。正直、今でもあのタイムが幻なんじゃないかと思つてしまう」

「同感だ。でも実際のレースで使う機械で測つたんだろ？」

「ああ。あれを疑つたらこの前のアイビスサマーダッシュだって公式記録取り消しになつ

てしまう」

信じがたい記録だが事実だ。あの時は参考までに自分の時計も見ていたが、当然ながら差は無かった。

「過去のループ、世界でドーベルがこれだけ短距離適性を持っていたことはあつたか？」
少しばかりの好奇心から尋ねてみた。さまざまな世界、たとえば彼女が以前語ったところによれば自身がヒトミミの存在——ヒト女性と同一ような姿になっていたような世界さえも経てきたであろうゴールドシップなら、他にも何もかもが違う世界も経験してきたに違いなかった。

「一回だけあつた。あの世界の学園の連中はみんなアタシが知っている適性と全く違ってたから混乱したし、怖いくらいあつたな」

「たとえば？」

「高等部のスマートファルコン、底抜けに明るいうマドルにしてダートの『赤鬼』。あいつが芝のレースでサイレンススズカみたいな走りをしてぶつちぎりでクラシック三冠獲った、って聞いて信じるか？」

「スマートファルコンが？ いや、彼女は芝志望だったけど適性不一致で全く力が出せない

くて、ダートで大化けした、って」

「恐怖だよ。芝GIもダートGIも獲りまくって、さらにウイニングライブのステージだけでなくウマドル活動もこなす。あの無尽蔵なスタミナは誰も寄せつけなかった」

「まるで想像もつかない」

「そうだろう？ 他にも有馬に出てぶっち切りで勝つハルウラとか」

「もはや姿が他の世界と同じなだけで中身は完全に別の存在じゃないか」

何でもある世界だったようだ。ゴールドシップの話を受け入れてしまえば、今日の前にいるゴールドシップが短距離適性A評定相当なことも、本来短距離の適性はさして高くない体力測定結果だったドーベルが僅差でそれに食らいついたことも、正直ささいな話だった。

「何にせよ、だ。この世界のベルちゃんは、他の世界と一味違う距離適性持ちかもしれない。本当にトレーナー課程からヘッドハンティングして、ちやうどうちのチームにいない短距離選手として迎えてアタシがコーチングしたいくらいだ」

「だな……」

一応出走に向けての諸々の基礎的な仕込みをすると決めたが、本当のところはさらに一

歩踏み込んで、実際にレースに出したかった。

「とはいえ、本人が望まねえなら、それこそまぐれ勝ちしかできねえし、アタシの『勝利条件』とは多分無関係だから、そこはベルちゃんのお望みのままに、つてやつだ」

ゴールドシップはテーブルの上に置いていた水入りのペットボトルを取って水を近くの湯呑みに注ぎ、一気に飲み干した。間に和らぎ水を入れるのはいい習慣だが、あまりにも手慣れていたので、彼女に酒飲みの癖が身についてしまっているのではと思った。

「しかし、つくづくおデジのやつが今回欠席で良かったわ」

「なぜに」

「あいつは観察眼が鋭い。一緒に走っていたら絶対に異変に気付いてしまう。何より興奮したら口止めなんか効かないから、うっかり他の人に喋ってしまうか、あるいはベルちゃんをレースに出せと騒ぎそうだ」

「なるほど……」

「さて、やつぱ二合じや足んねえな。もうからつぽだ」

ゴールドシップは話の流れで自然にお酒の瓶を取って自分のお猪口に注いで一気に呷り、次いで俺のお猪口にも入れてくれた。

「おい」

「おっちゃんはいれに立った。その目を盗んでアタシが勝手に飲んだ。お猪口一杯だから中身が減ったことなんてシラフでもわからない。ほろ酔いならなおさら。オーケー？」

「ノーコメント」

OKと言ってしまおうとゴールドシップに責任をかぶせてしまふ気がしたのでノーコメントとした。きつちりしたウマ娘想いのトレーナー、それこそかつて理事長代理として学園を取り仕切った榎本^{かしもと}トレーナーならお酒を取り上げて説教をかましたところだろう。だが俺はやらない。

「でもうめえなこれ。アタシも四合瓶買つて帰るか。晩酌^{ばんしやく}にちようどいい」

「……ちよつと耳鳴りがしてゴールドシップの言葉が聞こえなかった。何て言ったんだ？」

ベタなとぼけ方をしたが、幸いゴールドシップは乗ってくれた。

「おっちゃんのが好きだぜ、つてな。へへっ」

屈託のない笑顔に思わずどきりとした。初対面の時に似たような、それとはまた少し違うような感覚だった。ちよつと落ち着かない感じでいると、ゴールドシップが不意にドア

の方に耳を向け、それからすぐに大声で扉の向こうに呼び掛けた。

「せっかくだから立ち聞きしないで入ってこいよ」

扉の外で何やら音がした後、ゾロゾロと入ってきたのはよく見知った四人。つまりうちのチームメンバー残り全員だった。

「盗み聞きをしてしまったこと、お詫びいたします」

マックイーンが深々と頭を下げ、他の面々もそれに倣^{なら}ったので、頭をそこまで下げる必要はないと逆にとどめることになった。

しかし、先ほどのゴールドシップとの会話はどこまで聞かれていたか。ゴールドシップに視線を向けると丁度向こうからもこちらに視線が向けられ、ウインクとOKサインが返された。……ドーベルの速さの話うんぬんは聞かれていないようだった。おそらく扉の前に誰かが来た時点で気付いてはいたんだろう。

「アタシがトレーナーのお酒を失敬していたのは秘密な？」

「ええ。その秘密は守ります」

「よろしくウ！」

5 ホッコータルマエの困惑

密室になり得る場所でトレーナー（男）と女子生徒（ウマ娘）複数がいるのはよろしくないで、ロビーの方へ移動した。ゴールドシップとサシで吞んでいた件は柵に上げることにする。

みんなに座ってもらって、自販機で適当にジュースを買って配ったが、四人は居心地悪そうに小さくなっていた。

みんなにこれ以上気まずさを感じさせないようにするためか、ゴールドシップは先ほどまでとはうって変わって陽気なモードに変わった。

「今の浴衣姿のネイチャだと徳利とお猪口がとても似合いそうだな。な、おっちゃん？」
「コメントをしたらどう転がっても生徒へのセクハラか何かだろうが。学園をクビになつてついでに法廷送りだ」

ゴールドシップと俺の会話に少しはリラックスできたのか、ネイチヤがほっとしたような、呆れたような感じで話を始めた。

「いいですよー、酒呑み姿が似合うのは商店街のおばさま方からのお墨つきなんでー。

あ、お酒は呑んだことありませんよ？」

「たとえ呑んでも、ここには咎める奴はいねえから安心しろ」

「デスヨネー。まあそれはさておき、見た目なんですよ問題は。ちよつと渋めの色合いの服を着て髪結び方を変えたら、三十代後半の集まりに溶け込んでも見分けがつかない、一緒に一杯やつてそうだって言われちゃいましてね。……おばさま方は華麗で遠回しな言い方で表現してくれたけど、ストレートに言えば二十歳以上も歳食ったオバチャン扱いじゃん！ って。はあ……………」

「それだけ落ち着きがあるよき人である、という信頼の証であると受け取るのがよろしいかと……」

マックイーンの取り成しに、ゴールドシップがマックイーンに向けて余計な言葉を足した。

「マックちゃんもメジロの集まりだと超お嬢様な振る舞いだけだよ、普段はスイーツをパ

クパクしてまんまるになったり、休みの日は野球の中継を観つつお茶の間監督やってたり、なんというか、キャラの温度差で風邪を引く的なあれだし」

「今年はまだ丸くなっております！ あ……」

「今年は」「まだ」、ということとはそれ以前には何かがあつたらしいことが窺^{うかが}えたが、今は問題がないのでとりあえずOK。以前の野球応援の時にお菓子が綺麗さっぱり消えた事件みたいなことが起きないよう気をつけたい。顔を赤くして姿勢的な意味で丸くなつてしまったマックイーンを見て、ドーベルが苦笑した。

「大丈夫だよマックイーン。家の集まりでは堂々としててすごいな、つて思うし。野球は、その、学園では大声を上げないようにしてくれろと嬉しいな……？」

「深く反省しております……」

ちょうど良い機会なのでドーベルにも少し聞いてみることにした。

「ドーベル。今回いろいろと走ってみてどうだった？」

「はい。トレーナー課程だと全力を出して走る機会がどうしても少ないので、レース並みの速さで身体の動かし方を実践できてとても勉強になりました」

「それは良かった。新潟千直を走ってみた感触は？」

「コーナーがなくてちよつと戸惑いました。でも走っているとひたすら前を目指すシンブルさがあつて楽しめました。たぶん短距離の人とは全く張り合えないんでしょうけど。ひたすら集中してたから何秒で走ったかも分からないし」

「うん」

ドーベルの横にいるホツコータルマエさんの表情が強張^{こわば}った。俺とゴールドシップ以外で唯一あの模擬レースの本当のレースタイム、ドーベルの本当のタイムを知る唯一の子。本当のレースタイムは五五秒一。過去のアイビスサマーダッシュでは勝ちタイムがこれよりも一秒遅い時だつてあつた。さすがに五秒もサバを読んだらネイチャやマックイーンが気付きやしないかと思つたが、ひとまず気付かれなかつたようだった。

「となると、調子がかなり狂いましたが、通常の私達の千メートルのラップ目標には近かつたと考えてよいのでしょうか？」

「いつもと勝手が違い過ぎて、頭の中で数えてたのが飛んじゃつてさ。ま、でもなんとか走れたなら一応の訓練にはなつたのかな？ レースに直接活かせるかどうか分かんないけど」

ネイチャの真つ当な感想に乗つかる形で話をまとめる方向に誘導することにした。

「そうだな。今回は直接活かすのは難しいと思う。でも、得意とする戦場が違うとまた違う走り方がある、というのは体験できたんじゃないか？」

「そうですね」

「だねー」

ネイチャとマックイーンがすっかりリラックスした雰囲気を取り戻した中、タルマエさんは固まったままだった。視線が合った時、こちらに向けた表情から内心がすぐに読み取れた。――『このとんでもないタイムを隠したままでいいんでしょうか？』

その無言の問いに、俺も、そして途中からその表情に気付いたゴールドシップも、まだ答えを返すことができなかった。

レース場からの帰り、新潟駅のお店で日本酒を調達した。昨日飲んだ銘柄の四合瓶二本をそれぞれ包んでもらい、両手が塞がっていたのでゴールドシップに持たせた。学園のところで「うっかり」一本だけしか受け取らずに解散して帰ってしまうかもしれない。

☆ ☆ ☆

日本酒の瓶を「うっかり」受け取り忘れたものの、ゴールドシップに二本ともきっちり押しつけられた。やはり寮の一室に隠しておくのはまずいらしい。酒をどう保管するか、他のメンバーに悟られないよう小声で話した。

「同室の奴は旅してばっかだし、酒の十本や二十本飾つても動じそうもねえが、冷蔵できないのが痛い。代わりにトレーナー室かトレーナー寮で冷やしといてくれ。呑みに行く」

「……トレーナー室の冷蔵庫に入れておく。独りで勝手に呑まないように」

「サンキュ」

全員と別れてチームトレーナー室へ向かい、しばらく空けている間にすっかり蒸し風呂状態になっていた部屋の窓とドアを開け放ち、一旦風を通してからエアコンをつけた。日本酒を二本とも箱から取り出し、冷蔵庫の隅の方に並べた。誰かが間違えて呑むことないだろう。

出張報告書・合宿活動報告書を仕上げるのは明日以降にするとして、ひとまずメモくらいは作っておきたい。その準備のために作業機の引き出しを開け、ふと目に留まった巻物を取り出して広げた。

ついこの春、チームメンバーが総入れ替えになる直前まで使っていて、その後も実は学

園に届け出た正式名称になっているチーム名が書かれた布製の垂れ幕だった。

「チーム『アクアマリン』」

部屋の表に出て、仮名称の看板を外し、涼やかな地の色の垂れ幕を掛け直した。

夏はまだまだこれからだが、あつという間に秋が来る。ゴールドシップのデビュー予定は秋にしているので、そろそろ本人にも伝えて仕上げのトレーニングに移りたい。他のメンバーもそろそろデビューを考える時期だった。……そして、あれほどの走りを見せたドーベルの進路をどうするかについても考えなければならぬ。

課題は山積しているが、一つずつ片付けるより他ない。地道に進めよう。

間章 チーム名紛争、一旦終結

学園のトレーナーを集めた定例会議を終えてチームトレーナー室に帰る途中で、後方からとてつもない衝撃を受けて吹っ飛ばされた。飛ばされ、そのまま地面に激突しかけたその直前に誰かに抱き止められ、そしてそのまま地面に組み伏せられてしまった。

「どういふことだよおっちゃん！」

頭上から降ってきた声はゴールドシップのもので、目の前で振られた紙は今年度結成されているチームの一覧だった。その中にはもちろん我々のチームの名前もあり、担当トレーナーと所属生徒の名前も書かれている。いわく、

チーム『アクアマリン』

担当トレーナー…白江 亮

所属生徒…ゴールドシップ、ナイスネイチャ、メジロマックイーン、メジロドーベル、
アグネスデジタル

「チーム名が違うじゃねえか！ さつきトレーナー室行ったら看板も変わってやがった！
謀^{はか}ったなおっちゃん！」

地面から抱き上げられて今度はブンブン高速シェイクされて、そのまま意識が遠心力で
彼方に飛んだ――

「――ハッ!!」

気がついたら保健室のベッドの上で、横にはいじけた表情のゴールドシップ、さらにその横には疲れ切った表情のマックイーンとネイチャが並んでいた。

「お目覚めですかトレーナーさん。脳細胞が消し飛んだりしてない？」

「多分大丈夫だと思うが……」

「じゃあおつけー。で、現状についてはマックイーンからどうぞー」

ネイチヤが話をマックイーンに引き継いで少し離れた丸椅子に座り、天井を見上げつつ手をだらりと下げて脱力した。マックイーンも眉間を抑えつつ、溜め息をついて話し始めた。

「コホン。チーム名変更といいますが、トレーナーさんが昨年度までお使いだったチーム名が今年度も引き続き採用となった件について、ゴールドシップさんを『説得』いたしました」

「キン肉バスターは説得って言わねーんだよ……」

「トレーナーさんを物理的に振り回したことへの反省が不足していますわね？」

「すみませんつしたマック大明神様」

とりあえず事態は解決したらしい。頭や身体の痛みも特に無かった。

「ま、もともとチーム名のアイデアが全く何もなかった状態から流れで決まっちゃったようなものだし、そもそもチーム名の届出も初っ端から元のチーム名のままだったんでしょ？」

「まあな。たまたまチームメンバーが総入れ替えになったから、心機一転別のチーム名にしてみようかと思っただが、やつぱり慣れたものが良くてな」

「うんうん。『アクアマリン』っていい名前だね。ネイチヤさん太鼓判のお気に入り」

「『ルビー』とか『サファイア』とか、いつそ『ゴールド』に変えても良かったんじゃない？」
別名を提案してきたゴールドシップに、チーム名の現状を伝えた。

「あー、チーム名の付け方にはいろいろあるんだが、宝石とか貴金属の系列は人気がある。ただ、名門チームが名乗っていたことがある名前だとみんな遠慮して名乗りがらないから、人気があるわりには誰も使っていなかったりする」

「へえ……」

感心しているネイチヤの姿を見つつ、もし『アクアマリン』以外に宝石や貴金属でチーム名を付けるとしたら、何が良さそうか考えてみた。

ゴールドシップからの連想だと、直截ちよくせつ的なものは先ほど挙がった『ゴールド』だろうか。芦毛あしげからの連想で『シルバー』もありそうだったが、験担げんかつぎとしては避けておきたい。

我がチーム名『アクアマリン』つながりの誕生石系列だと、現時点ではうち以外に採用チームはない。ここ一、二年でその名前をつけていたチームがトレーナーの定年退職で解

散し、次に名乗ろうと手を挙げるトレーナーがまだいない状態だった。ちなみにうちは、今までその名前を名乗ったチームがおらず、他に申請した人もいなかったためすんなりと通った。

「ちなみに、トレーナーさんはなぜこの名前を選ばれたのでしょうか？」

「俺が三月生まれなのもあるし、色が気に言っているものもあるが、いろいろな物事が始まる春っぽくていいかもなつて」

「なるほど……」

保健室に戻ってきた養護教諭に一通り診^みてもらい、異常は無さそうだとの結果が出たため、揃ってチームトレーナー室に戻ることにした。ゴールドシップが何やら話したそうにこちらをちらちら見ていたので、わざと歩みを遅くしてマックイーンとネイチャを先に行かせ、ゴールドシップと並んだ。

「……蹴り食らわしたりして悪かったよ」

「問題ない。『ゴールドシップのトレーナーたるもの、飛び蹴^けりをいなしてこそ一人前』だったか。別世界のトレーナー達は身体構造と生命力が強^{きようじん}靱^{じん}だな」

「ハハッ、おっちゃん強いな。いろんなとこで。おっちゃんの前だとどうしてもハジけらんなくてお清楚せいそになっちまう」

「ご冗談を」

お互いに小さく笑い、しばし足音だけになった。

「チーム名への反応、もしかして『百四十三回目』絡みか？」

「いや。それとは別のずっと昔、アタシじゃなくてまわりのみんなが地獄にいた世界だ。

その時ちよつとだけ一緒にいた連中のチーム名がこと同じだったんだ。カタカナじゃなくて漢字で『藍玉らんぎょく』だったんだが、ちよつと思ひ出しちまって取り乱した。……二度と帰ってこなかったのはな……」

「そうか」

「ま、この世のこの国ならドンパチも起きそうにないし、おっちゃんとアタシがいれば何も起きねえし起こさせねえし」

さまざまな世界を旅してきたゴールドシップが、ここまでどのような世界を見てきたのかは断片的にしか知らない。『百四十三回目』のループの話は最初に結構してくれたし、『四本足のウマ』の世界の話もだいぶ聞いて詳しくなった。それとはまた別のループの話

のようだし、まだまだ彼女について知らないことは多そうだった。

「ま、シケた話はここまでだ！ マックイーン！ トレーナー室の冷蔵庫に入れてた桃のケーキ全部食っちゃってねえよな？」

ゴールドシップの声に、ゲートオープンへの反応よりも速くマックイーンが振り向いた。

「桃のケーキ!? ……コホン、ケーキの存在はたった今知りましたが、もし知っていたとしても勝手に食べるようなはしたない真似はいたしません! ……おそらく……」

齒切れの悪いマックイーンの言葉にネイチャが肩をすくめた。

「そこは自信を持って言ってほしいんですけどねえ。ゴルシさんや、その桃のケーキはよくあるフルーツが入ったケーキの桃バージュンみたいなもの? それとも桃を丸ごと一個使って中にクリームとか入れてる系?」

「丸ごと一個の方だぜ。商店街のケーキ屋に買いに行ったら『ネイチャんのチームでしょ!』って言われて半額にさげかけたからよ、押し問答して二割引きで手を打った」

「アハハ……全くあそこは商売っ気が無さすぎ。今度御礼がてら何か持つてくかー」

つい最近、その洋菓子店の前を通った時に桃のケーキを見たのを思い出した。丸ごと一個使っているタイプは一個八百円くらいとなかなかの一品だった覚えがある。ゴールドシップも随分大盤振る舞いをしたものだ。今度は俺の方から還元してやらねば。

（『黄金の船、たどり着きたる先』第四巻に続く）

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

pxiv 連載シリーズ『訳ありなゴールドシップ』、同人誌化時タイトル『黄金の船、たり着きたる先』の第三巻です。例によつて第二巻から間が空いたのは我が不徳の致すところであります（二回目）。

今回はチーム一行がクラシック級の三冠路線、皐月賞と日本ダービーを観戦し、さらにその年の夏に新潟を一直線に走る話です。pxiv 連載時は観戦の章を完全に飛ばしているため、その部分は丸ごと書き下ろしとなっています。また、新潟千直の話も連載版から少しばかり整えました。

ここからは蛇足、裏話（本編ネタバレ多少あり）です。

日本ダービー観戦のくだりを書いていたのは五月三十一日、第九十三回東京優駿（日本ダービー）の日でした。皐月賞馬のロブチェンさんが最後に一気に差し切り、二着のパントルナイーフさんにアタマ差先んじました。二冠馬の誕生をテレビ中継とは言え見届けることができてとても感動しました。ちなみに私が応援していたお馬さんは残念ながら着外でした。本作ではゴルシの前に作中時点で二冠、後に三冠を獲ったオルフェーヴルさん、そしてダービーで二着となったウインバリアシオンさんに登場頂いています。

ちなみに、不良馬場での開催事例として出した一九六九年のダービーに出たメジロアマさん（メジロマックインさんの父父）について、ゴールドシップがタイムスリップして色々あったという話を書いています。pixivタイトル『彼方、浅間の嶺』として連載（完結済み）、一部改稿してタイトルを『五十年の彼方』に付け替えた同人誌をBOOTHで通販し、サークルサイトで電子書籍（PDF）版を公開しています。読んでね。

次の章で新潟千直を出したのは完全に自分の趣味です。本作の登場人物達との関連で言う、メジロドーベルさんの新馬戦が、大改修が行われる前の新潟競馬場・芝千メートル

ルでした（一九九六年七月十三日・新潟第七レース）。その当時は直線コースではなく、コース中にコーナーを含む普通のコースで施行されていました。ちなみにドーベルさんはここで初出走初勝利を飾っています。

ちなみに直線の申し子、公式ですさまじいまでに直線に全振りしたキャラ付けとなったカルストンライトオさんは今回は名前しか出てきません。

登場人物が違うシリーズものや単発ものの、さらには以前から書き進めている『ご注文はうさぎですか？』の長編など、相変わらず同時進行が続いています。どの作品も確実にpixiv投稿や同人誌製作を進めていきます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

麦（穀物P）

黄金の船、たどり着きたる先 三

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二六年（令和八年）六月二十八日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)